



13
1245
23

開卷驚奇俠客傳第五集卷之三

浪華 蒜園主人編次

第四十五回

怒と宥りて守護再策と議と
義と忘まて縉紳偽使と做る

話説畠山持永の豫ての志願成就と今宵姑摩姫と迎へ拿んと想へ漫ふ
魂漂蕩て鬼狂きまてぬ。怡悦真頭と只管家人們と急過して立て。佳禮の
準備と噴促と小原是富う家あると志小足ぬ東西へあつねと。家隸の
恭勝媒鳥們と幾々の懸兵の。開餘の名もる奴隸們と長総の他ふの
侍女とてもあつては。俸由と父ふ報て。侍婢幾名も京都より。美麗と擇て差下
とべく。豫て料ひううろふ。就盛が密意めて。俄然ふ期目と縮めると。有懸ふ
人火俸と嗣て。就盛ふ商量せふ。就盛就ち自家の。侍婢們と多く送せり。



俠客傳第五集卷之三

浪華五堂印

そのひんぎ や、みそらきりて、つひ
當日督儀の役小充。且又俺属小隸らまゝ。畠山家の家人們小巳が即黨を差
加へて玄関向の津と執せざるは、なほ不足もあらやうなれども、さうして馴る津
さるねば、彼以侶小摺揃と、鼎の沸ぐ一般多と。持永連小焦燥で、式の如く辛ら
重昏迄小準備し、且赤阪の館に前小轎子稟拿べき假全戸と設け、木造本
泰勝小峯田譽九郎と相副て、稟拿べき役者と。另小兩名の頭人小夥兵幾個と
属へ、武器嚴しく十字警固とさせ、館の前門まで大箒と燃連れ中門より
して轎子と納べき。地道の毛櫃と舗並書院の潤色洲濱の結構、媳婦君の子房侍
女の局舎、寢殿の打点小至るまで、光るが如く經營する。情景宜く想像べし。侍女臈の
専女の役として、長総是と職で、在髪小粧ひつ。新小貳ひ小衣手と着飾と。襦衣
和より小着做る。容体有繫小鎌倉の寵臣らるる。藤白隼人正安同が、妻の果て
有る。進退更朽惜らむ。物執負む振まひる。其他の遊佐が館より、今日しも

来り侍女們あれど、這里と晴と打紛まへ人跡希る。片山郷も花と紅葉と
一時小咲匂ひう心地せり。閒話不題就盛職分の重るる。藤持媒鳥と媒
妣の名代うて正直が河備の館へ差つ。自己の黄昏う城と出て、赤阪の館に至
りて、萬事を指揮し、甲夜過る比及まで等とも、音もせぬ。持永へ更らる。就盛
も等説て且不審も想ひまへ人と差して、覗する。河備の館も混雜を詳き
光景も知さる。藤持媒鳥と喚出て、催促する。辛らじと夜半
過る程小松明の光多く所看て、陸續とて来小ま。遠看み出しく、奴隸們が
次第小報り小。持永就盛禮服小改め等。間も新夫人の轎子へ假合小看
ね、河備の家長湯浅敦義、今一名の侍と作法の如く、轎子と、徳女、泰勝譽九郎、立出、局
小上臈の轎子まで、悉く稟拿て、新夫人の酒盃と賜る式も果々多。孰義の
べきと、執泰勝們の事ありて、館内まで隸行ぬ。媒鳥の門前送小下馬して、案内小

立六島山家の轎夫の轎子と拾ひて徐々進み入る。浦風の小上鴨と高女と共
 小引添て歩む。長総們出迎へ豫て構へし子房の内へ案内せむ。新夫人の轎子
 と下て扶掖し、那裡小入て總ひつ。長総其餘の女房ども、開次下の間小待と萬の
 侍、執頭、浦風の局、女、阿、婢と俱小新夫人の傍小在て準備せむ。蕭々せ。顔は些
 少も露まきと進退のあらず。武家小生、育撮裙捌け。現も姑摩姫かると想ひ
 小室の長総們の偷者せんも有繫せ。低語らふせて居るる。持永の心あはし
 て先疾透者せんと念へ。椽側傳ひ小竊ひ来て窓の障子と唾めて濡し。密小指
 せ。穴隙と穿ち、窺ひ看ども。浦風が快くも心と利せ。屏風と和ら押詰て障
 子小引廻らし。うらむ。看ども看ども。徒小靴を隔て痒と搔く。心地のしつて為
 街らうれ。就ても看んと俺さう。臆ひらる。益らう。兒と。眩きあが。技足を退き
 出とて。小同意念の。木造泰勝假舎の役。竟ると即て走回すと物蔭らう。那

とめがひうちみえ。美人やあると覗ひ。小被衣小面小省も。足も。他とハ
 千里鏡の裡小所看らう。美人やあると覗ひ。小被衣小面小省も。足も。他とハ
 無比女人と看て。おどろく。さうさう云へ。も。あ。バ。同く。這裡小竊ひ来て。犹克偷
 看せんと。撞見頭小持永と。不像首と。昭着せ。涙と。駭き眼。うら。の。出。ま。で
 小覚む。と。聲。ども。揚。得。せ。偷。音。小。木。小。欵。と。透。看。ま。が。這。ハ。令。郎。君。う。心。地。へ。出
 ま。の。一。向。小。御。免。と。被。さ。と。平。張。俯。ても。真。箇。中。陳。謝。る。声。々。憎。々。と。持。永。ハ。俺
 と。忘。る。ま。で。小。心。花。開。け。折。柄。ら。と。怎。で。久。各。ひ。き。痛。苦。と。笑。小。混。ら。て。已。が
 子。舎。へ。退。ま。る。介。程。小。就。盛。ハ。持。永。と。伴。ひ。て。威。儀。と。正。と。立。出。つ。媒。鳥。風
 爐。八。郎。と。喚。出。て。新。夫。人。小。恁。々。と。听。え。ま。す。は。苦。子。ハ。長。総。們。小。仰。せ。浦。風。と。引
 て。主。位。小。着。持。永。ハ。客。位。小。坐。と。互。の。口。誼。言。寡。小。室。町。様。の。三。々。九。度。浦。風。酌。小。立。て。
 儀。の。如。く。小。竟。々。と。其。次。ハ。席。と。更。て。持。永。就。盛。小。旁。と。謝。し。酒。肴。と。換。て。曾。待。ハ。就。盛
 も。祝。言。と。陳。て。媒。鳥。泰。勝。風。爐。八。郎。們。と。召。出。て。各。方。と。慰。め。つ。聲。も。稍。高。く。ら。う

まで酒を吃せて恰好遊佐の城へ去る風焼八郎衰義も河備の館へ回る。正真
 今宵の首尾を脱ぎ注進しうろくを却説持永の衣服と換侍女們小扶拽きて
 新婦の閨房小入て着る小赫たる一燭も悉く消果て壁小背たる狐燈の下小
 小上臈の浦風が畏と侍と持永顧みて這ハ不意き因縁とて你們も親く
 さうねと會尺しうろく手と拍鳴と噫反暗き所ハ快疾燭火と拿末とと大音小
 罵ると浦風の推禁め姫への所勞坐せと今宵の御佳禮然と稟難く押て
 出立り六頼く即君の御意めて聊ちん儀式と畧をのみ唯疾寢てまひはや
 最大人ひの所見まども女子ハ孰も裏漸しきの小信は開けお小伊所勞も
 出し小と笑と含とひいへ持永も打笑ひ和女郎が然とハ道理ハ俺も少
 所勞氣りさる床上の献酬ハ和女郎と這めて果きん飲と酔う俛小唱と遺忘
 て不覚小戯と長総小酌と把と又四五盃と傾けう。若子ハ教悔られう

世俗の習礼
 床不面
 例る俗儀
 難記
 今應水中の管
 只滑管の
 之看官幸の
 妙りかま

如く。衾衣の中小蹲と息とも做で居うと持永ハ羞観き忘てや然と
 物愧しこの這首出て唯一つ吃るすと舌疾ふと回復もせ在るハ肛裏小
 思入り現姑摩姫ハ智勇小秀。婦女とと男女の情ハ未得知未通女子え
 ハ羞愧う小こそおも思ハ強ても哄誘は恰似中と長総們と次席へ出立直
 て去と長総ハ酔う俛小ヤヨ令即る年来のん所勞も遺漏る。今宵ハ晴さ
 るひんハ羨と高り小戲弄と出ると持永ハ所ハ能と打笑。袴と脱と浦風
 押置ひ開間小和ら屏風と曳用へ入らうと躊躇。傍の行燈と挑んととまは浦
 風快く意得て開ハ又喜小任と曳のハ様と揺消ハ噫と兼鳴する持永
 と箭庭小手と把推遣て竊と打笑ハ間の紙門と押因て疾く外面へ出らう。
 持永ハ搔搜寄て同衾小入て着る。汗も浴小臥着ると只姑摩姫と思ひうら
 醉小任と愧と忘と。年来日來の繫想の限と長々と説連けて恰も瘡物小



昆王一夜
變化瓦礫
おまきやまきりの秘の果
さびしうらうらうのれい

障る一般漸々慰めければ甘子も時小暨ひさ婦女も甚だ憐れ小愛憐と所知節
も有小豫て姑摩姫と蕩まんそ。那豪衰が授けり。随喜破負香と薫せしむ。慾火連小
發動と堪ぬぐり小覺まで只覺らまじと物と云と徐々小身と委すは持永頻
小意と操て雲とさう雨とさう。終小夫婦と成さう。持永の負問より心労さ小立添
て酒の酔酷く上さるる。前後も知と寝さう。不凶夢寤て四下と看む。窓小朝陽
の差登りて辰の半刻も過ぬと看ゆる小急忙しく身と起し。但見が新婦の前夜の
依小傍小卧て在る。卒と差覗きて覗へ。這も如何姑摩姫と只麼念ひて。
偕老の合番と結び新媳婦の額大く口方ちて頬え高き谷のたを哄ふ山下風
小吹散と龍田の山紅葉と看ゆる。うりの痘瘡の癩向くある小白粉と施し
う光景の譬喩つぐもる。形容も呆了と半晌さう。物も言とて居さう
く。忽地涙吐いす。小怒氣憤然と湧上る。苛疾き聲と掉絞。這奴抑甚麼

的る。咱這便室へ偷入る。快々起ると罵て背と礎と打う。驚駭
きあがり起直る。猶克と去給の冬。河備の館と酌小立さる。黑暗天女
戸隱山の鬼女と念ひ。正直の女見甘子であらる。持永再遍肝と消し。和ま
怎の縁故と以て俺寢所へ在らん。といども甘子の只羞らひて。回合とさ小甚
り。屢嘖て止さう。物音を聴て浦風ハ紙門とやと推開て。徐々と持永が身
邊小衝居て手と束ね。即君ち眼と寤させさう。姫も起させさうと。
空知ぬ貌小いふと見て。持長急小眷願つ。ヤヨ女此是姑摩姫とぞ。念ひして
か。醜女と吾閨房。率と来り。這ハ正直が料理。但し誰か付さ
ぞ快姑摩姫と出さる。と敦圍猛く罵と浦風ハ騒ぐ。氣色もさる。姑摩姫
殿小非と。念ひして知せさう。といせも果と持永の拳と握て眼と睜り。這
女奴が大胆さる。嚮小正直が山亭より。千里鏡以て慥小看者。姑摩姫ハ沉

大正三十四年六月
六
三十三三十四

魚落雁閉月羞花の美人よりふかく醜悪き女を送りて誰か開と實とせん。此是正直が宿所とて一遍會う他が息女の苦姫とて忘あして闇夜も者混んやといふ浦風些とも怯まぬ姑摩姫とのふ非るよりと既小知せぬるが更小奴家小誰人ぞと問せぬやうもろと半分論せぬ持永の可黙女奴辱くも院宣御説の故とて持永が妻小賜へ。楠姑摩姫と暗々小換て憊る無慙の白痴と未せうとて這僕小倅済むと想ふや抑誰が較計て這企とへ做ろぞ。真直小白状せよ。稟び目小鬼者せんと擬勢稠で責詰る浦風い尚も臆せば。開のこまのりるる。河備なるの御息女と娶らせぬ人與小とて河備なるの宿所へ納米と贈るの一六。河備なるの御息女と嫁しぬ人の當然の理さうと更醜悪とて罪さるる六畏憚らう仰ともぢぢえぢぢとと所て持永怒不堪と任他餘の倅ハ左ま右ま院宣御説と茂如や。罪

科と乳と。正直一家滅亡せん疑あひまの胸想識べき婦人と敵手小論弁弁と却也無益の至快々出て去と余と整立て踊り出て媒鳥やあると換立とハ倅持媒鳥ハ甚麼倅やんと出て来つと持永ハ者と等と聲を勵ます。想ふ小違ひ大愛あり。快々馬と牽りて来と遊佐の城へ赴きて今急邊更と譚せん和郎ハ夥兵小戎具をせ。俺着長も拿持せ。疾く那里へ瀆くべし。委曲の情由ハ那里まで説も听せん急げくと連小厲く下知すれ。媒鳥ハ甚麼とも辨へと推回と向へぎ擬勢るとハ隨小馬小鞍措き快様前小牽立えう。持永ハ刀と把跟よう瀆けといふ小鞭られて驀々地小遊佐の城と馳驅出と媒鳥ハ猛可小着急慌忙忙りき夥兵十名小腹卷させて持永ハ鏡櫃を奴隷們小扛擔せ。その身も鏡把て投懸喘ぎと追うる。就盛ハ佳とも知ぬ日高く起て徐小朝餉と果せり頃接待の若党が赤段なる火急なる。御用ありとて来ます

とうと報るふ就盛不審から客殿小請いと忙しく袴を着て出會うふ座も未着
 り程小持永の聲繫ていふ貴老の持永と什麼の與小許して恥辱と手へらさるるごと
 氣色と変て罵るふ就盛の思ひも係る驚きて在下不肖の身あまじきも因て彼
 管領家の御令息小對しなう。怎で鹿野と存せき。開い亦何等の律あるふ。白藏と
 仰らるべしといふ持永息接取と流汗と推拭して楠姑摩姫と娶んとて。貴老
 媒妁せられふ。怎やと正直が女兒の醜婦と送來とて。恥辱と手へらるるやん持
 永愚昧と雖ども怎ぞ昆玉と燕石とと女へらるる。按小貴老も正直と膝合せて
 咲さう。回るふ因て存る旨あり。如何ぞやと膝と前めて。瞋と睨と無念の顔色
 打も果さん光景ふ就盛も大駭き開ハ又意外の椿事。休も知せぬ如く。在下も此
 属う。意と盡して申替婿の全成就とせきやうふ。本走せしを怎ふて。さる騙計
 と構んぬ。省惟ひても見るふ。父祖代々御被官とて。什麼律も御蔭ふ依ぬや

うき。在下が怎ゆと然様の不忠を致す。按小姑摩姫が机変ふて正直
 と欺詐とて。恚る詭計と構る。やん欵且御心を鎮めるひて。律の始末を
 詳小听れと後ふ又愚案を述べ。いづかといふ。持永辛うして面と此二少和
 らげて有る序次を話説と。かく欺るる上らる。快々河備へ押寄て。正直が白
 髪首と。拿てやハ措るべき。貴老倘他と同意も。加勢とて後と語らまよ。
 既小媒鳥小戎具さきて。門邊小等せ措れば。直小那里へ赴くべしと立んと
 する。と就盛ハ着忙しく。推禁めあん腹立ハ理ま。正直ハ小身と。色ども御直
 泰の的なるを。伺い。私小誅。あつ。おん身上小疎忽の祟ハ遁と。それハ
 且正直と喚寄て。仔細と回ひ開く。思者小任す。とも遅き。非ど。倘さ。响
 みの就盛も。恚て。外小看ん。必あん先隊仕る。律と。弘も。向む。と。結果ん
 ハ宜し。と。只管在下小任せ。頻小諫めて止ま。持永漸々怒氣を押し

然らば目今正直と這首へ喚て弘明も久在下の家小回るとも。面白うは這里
 小在て始終の事を窺へん。尚正直が詭計するが即時小免し稟さぶ。この小就
 盛稍安堵して就て譽九郎と喚出して河備へ差て正直と喚り。持永は別室小て
 朝餉と出して管待多。却説棟正直の君子と出遣う。遣う後も心のこころ限ハ
 ること。今更籌策の出すと知後。只得木石と相對ひて回らぬ悔の噂のそ為
 つ居る。小曉天候敦義が回来て。那里の首尾の好す事と云々と報し。ふ
 此の心安堵とこと尚亦露頭し。とんどう。持永が怎ふとんと。念へばいゝ安
 くらと枕小着ても熟睡のる。既小今夜ハ明果され。快起出て朝餉と果し。
 又木石と同緯と。論出でのこも得在る。近侍の的も分付て。赤阪の方へ出差。那
 首の動静と現ふ。要時して立回り。赤阪なるハ只一騎馬と飛せ。方僅遊
 佐の城へ出るぬ。報る。正直とこれと。猛可小緯の出来し如く。心を冷して居

う處へ就盛が使者。誉田譽九郎と名告て對面せんと。ひ入る。驚破と想ふ
 心を静めて出てこれ小會する。小譽九郎の就盛が口状と述。且夜前の婚姻と祝
 し。さて火急小御商量の旨の目今在下の方へ来らる。とのこ。正直の驚駭
 げと去て止べき勢する。就開へ参る。とて譽九郎と回。差件當と催してきて
 木石小恠々と暗々小告と怎と。ても就盛が火急小喚ハ好意小あり。時宜小依てハ
 大變小。暨が緯も計ごと。うとて今將如何せん。さうハ能意得る。といひ棄て出
 去。木石も今更ハ危殆き物と念へども。差てハ緯の落着とべき勢する。と。扯れ
 得せ。念難る。額小手と當。正直が後影と。要時目送て居らる。正直ハ馬を疾
 めて。遊佐の城へ去て看ま。玄園の旁邊小。條持媒鳥が夥兵ども。小手脚當小腹
 巻して。各々戎器と携へ。今緯有んと。小容体と。十分小鬼胎と抱き。原來
 持永就盛們前夜の事を憤りて。裁せん。と。量り。と。め。占子ハ既小死。う。欬さ。も。知

るが怠りもして明を小陳謝せり。悔き事せ為てうと。歎けど今の為術も。眼隨
小立る敦義小。滓の意ど心得させ。案内をさせれば。接待の若党出迎へて疾く客舎へ
通し。正直適来も討て出のやあると眼配と。殊更奇異き様体も見え
ささげ右見左見。惟難て尋思ふ心を悩と折ら。就盛出て對面。正直と近く
招き。今且持永がひつる由と箇様々と説出て。貴方の什麼と念ひして。信様の
事を謀らむと。説でも著き滓ら。今番の誓姻の私一家の事らむと。院宣説
意の故と以て不肖なれども在下。媒妁と勤めつる。脱落ありての上へ對して
稟解べき由もあり。ささげ左馬殿の貴方と打も果さんとて立腹ありしと辛らじて
在下。推止め。一回貴方仔細と向て。開くも怎生とも。進退せんと宥め措らう。
按小身の姑摩姫の姦計。抑又貴方の詐偽。知れども。回春も依て。自他一家
の滅亡とる滓あり。と面色を變と見え。正直の是と所て。面色土の如く。膝

芝戰慄して。預て右のん右のん。と惟ひ。滓す。一句も出移。唯一向小頭と下
左馬介殿の立腹も。貴老のちん疑難も。一箇として。理らむと。とのちあり。と
想ぬぬあり。あらむども。如何せん俺姪女の。前夜猛可小約と違へ。箇様々ふひ
し。争ひ。うごも。為方。在下。も自殺。と分解。せん。と。姪女。が。又。推禁。め
て。恣。做。と。誨。へ。う。と。荆。妻。が。諾。ひ。料。と。女。兒。と。以。て。赤。阪。の。館。へ。嫁。遣。ら。う。と。
首より尾中。と。此。も。藏。ま。ひ。姑。摩。姫。小。説。と。由。も。庚。帖。と。把。換。ら。ま。う。滓。由。も。
食。推。出。て。明。々。地。小。演。尽。し。つ。只。管。小。怠。狀。す。外。さ。う。い。ふ。就。盛。ハ。熟。听。く。駭
呆。と。舌。を。振。ひ。肛。裏。小。思。惟。や。う。意。外。小。出。う。る。姑。摩。姫。が。神。出。鬼。没。の。謀
畧。ハ。豪。表。ま。と。う。及。ぶ。べ。く。も。あ。ら。は。那。庚。帖。と。豪。表。ハ。只。麼。姑。摩。姫。が。本。命。と。思
ひ。て。是。を。調。伏。し。且。その。合。番。と。祈。り。う。法。験。を。き。ふ。あ。ら。は。れ。ど。案。小。違。ひ。苦
姫。と。祈。り。伏。て。持。永。が。妻。小。定。め。ら。る。ら。ぬ。さ。う。ふ。て。も。姑。摩。姫。ハ。怎。ら。う。故。院。宣

御説と矯る滓と知らるる人。是と按へて現他。神変不測の幻術あり。然るに正直が罪を以て京都へ訴出んも。院宣御説と偽らるる罪の這方へも係るべく。且の嚮小満家小諾ひ置る滓もあはれ露頭るが悉く。俺身上小繫るべし。奈何のせんと種々小案廻らし辛うじて一計を念得らるる。面と和らげて正直小いふや。案小相違の令姪女の机変令愛を以て換る手段一驚小餘あり。さるるや。あらう急疾く俺們を報もせど。却也小開謀を助けて共小在下までふ。かゝる危難と係られる。這食貴方の罪とのべし。任じても滓這首小及びて縦計貴方と就盛と刺交へて死すとも。管領父子も欺きて恥辱を奪きて事漏る。世の人口小贈多し。大がき家の瑕瑾とさるべし。されば目今京都へ稟して。貴方の罪を以てさるるど。恚もして令姪女を四引出して一日さるる。赤阪の館へ迎へる。違勅違説の罪ともさるる。まじ尚這入の左馬殿小商量して料理んといふ。

正直手を捺て。昨夜姪女違約せし時刺殺して晩生も腹を截んと思ひ。とも。原來管領并小貴老の。おん面皮も係らんと思ひ。且貴老赤阪へ既小到きて等とこれ。勢恚生とも術とて終小借料ひ。いひて姪女小荷擔して説意と。茂如する滓あり。き尚這入も然るべき。御商議のひ。恚るるも辞せむ。と。口管勧解して止さるる。且。就盛も打領き。然らば左馬殿小商議らん。暫く這里とて等と。一とて奥小入。持永小會ひ。件の由と告保して。き。諫ていひ。さるるや。正直が蠢愚の罪。免さるべき。あはれ。い。ち。ど。他。の。豫。も。知。る。ふ。如。く。痴。呆。さ。る。人。さ。る。と。ば。熟く姑摩姫小詐偽して。寔小途方小莫小。咱女兒とて換る。あ。わ。ど。の。鳥。乎の白痴でいへ。敵手小せん。無益さる。勿論這回の院宣御説。老候と晩生と。暗々小議して。為し。さるる。訴へ出。却也小這方の脱落とさるべき。然る。とて。今。急。速。小。結。果。一。ひ。さ。る。他。も。柳。管。小。卿。先。代。より。昵。近。の。的。さ。る。と。い。ふ。

北畠俊雅と
誤て俊雅と
せう且此人の
俊雅卿の誤
るる詳々
峯尾小波
ふ如く然れ
ども看官既
ふ俊雅のさ
記藤もるべ

殺し罪の遁とど。さきへ枉て免しめて尚那女見甘子を。要時御館留め
措て睦しき様小管持多さる。又姑摩姫も心と放して。這方の機密を窺ふ
りるるべ。約莫他の幻術ありて。毎もく這方の機密と。前知らるる先と
超えて。謀畧の敗るる。他が不意の响ふ起して。謀畧を施さば。復又
他小欺瞞るべ。且他が院宣誤意と。猜ふ故に其勅書御下文のさき故られ
ハ今般へ北畠俊雅と太上皇の印使と号して。院宣と把持せ。誤意の晩生事
と執て俊雅と諸俱小立並んで。當城へ他を召出で傳へ。佯箇する响ふ公法られ
ハ假令假托と知らるる。誰小向ひて訴へ出き然らば。屈て承允すべ。尙ま強て
拒まらば。道路小奇兵を伏措て。搦拿と申館へ送らん。开ち手強くて搦難くば。
結果て錦の御旗以下の東西と。再遍把出し。五十日榎電次が古轍の如く。兵
と集る廻文と贖せて。老侯より披露し。あん答り有るべと。されども。恚まて小

とれ今誤
隨て更不
小説の擬名
るべ

滓煩累らあるべから。十小八九の成就とべら。甚くる物を念ひひのひそ。
さきへ且正直の許してさる。氣さく對面し。あひ後小到りて他と。謀畧を行
いと。必急進ある。と回りのひさ。持永流々小會得ひつ。さきへいさるる
る。あらば。今番の屈て免ん。秋後日の滓も。覚東るる。と俊雅とも喚下し。豪
表阿爾梨も請い。来て時小臨きて。拿綱るる。豪奪るる。難くも有ま。さるる。ハ
正直小對面せん。と。いへ。就盛領きて。枕も机密と耳語示し。舊の客殿小立出で。
正直小持永と更會す。れ。正直ハ一味地小。頭と叩きて。勸解る。而已。另小の。由るる。ら。
持永も又面と和らげ。滓の情由と承りて。執念く。貴翁と怨むべ。も。あ。併那
姑摩姫と。這儘ゆして。止べ。も。あ。且ハ上のおん。旨る。れ。ハ。余後齊一。小商議して。俺
們が方へ。送ら。ん。や。さ。ら。ば。甘子の。晩生が。嫡妻と。と。久後。秦晋の。好意と。若び。貴
公羽と。泰山と。仰ぐ。べ。と。い。ふ。ハ。正直。怡悦て。向後の。難義ハ。知。る。れ。と。先。適。未。て。て

浪風立ちか否むべきやうもさく。説く任小言稟すまの。就盛も取繕ひて尚云々。小
 籌策と正直小示し。是亦推辞む事を得ど。阿面々々と諾ひ。暇と
 告て宿所小回と妻木石を喚出て。箇様々々と告示せば。木石の覚束るる。且ど先當
 難へ通まされ。丈夫の恙るを祝し。稍安心を為さる。持永も為方あり。赤阪小回
 末て後の籌策の與と念へ。強て然や氣よく分り。其夜又も勉強して。甘子が臥房
 小到り。甘字も浦風も持永も今朝の氣色小肝を冷。向末怎小なる。ゆやんと密
 やう小譚合。心と痛めて在る。小案外小持永。心解り来小る。怎小為了欲と。旁
 小の恐懼し。思へども先開心をとり。小管待て大く歡喜。暗々小河備へ消息
 して。正直夫婦小伴由。細々と報遣ね。恁り。小成就の。言田譽九郎小机密と言
 含め。消息を齎して。有。次第と脱もさく。満家小注進。又自己が計策をも。委々
 報差さう。うさ。満家所て大。小駭き。或へ怒と。と為術。さ。ま。言。さ。高家表俊雅と

喚集へて。件の次第と。聶き告。且。俊雅へ。听く事。毎小驚歎。して。逞。き。女。多。と。て。
 不慮吐息と。吻を。有。繫の。豪表も。尿。果。約。莫。愚。僧。が。調。伏。の。法。凡。僧。の
 為る。所。と。同。く。龍。樹。井。より。傳。り。真。言。秘。密。の。奥。妙。小。役。優。婆。塞。の
 神呪と。加へて。傳。來。せる。修。法。の。祈。也。必。然。應。驗。ある。一。遍。も。行。な。ら。ひ。て。ね
 ど。甚。麼。や。く。の。姑。摩。姬。の。那。庚。帖。と。掠。換。え。這。ハ。正。直。が。疎。漏。る。き。れ。バ
 只。管。合。色。の。後。の。整。ひ。て。い。へ。ども。庚。帖。の。本。命。錯。ひ。れ。バ。竟。小。甘。子。と。令。即。君
 小。祈。と。隸。系。ら。せ。る。の。案。外。な。れ。ど。併。法。験。る。れ。も。ひ。の。汝。這。上。の。貧。道。も
 那。里。へ。立。越。え。外。さ。ら。う。遊。佐。氏。と。幫。助。け。て。他。が。幻。術。と。折。く。べ。し。き。れ。ど。も。既。小。貧。道。ハ
 嚮。日。那。宿。所。小。去。て。會。する。の。も。い。へ。面。と。對。せん。妙。る。を。這。ハ。遊。佐。氏。の。計。議
 此。如。く。今。番。の。北。畠。殿。御。劬。勞。さ。ら。う。御。下。向。り。て。恁。る。べ。し。と。い。へ。俊。雅。一。議
 小。及。び。開。の。安。き。程。の。ゆ。さ。ら。出。仕。小。間。暇。あ。ら。ざ。れ。ば。と。い。ふ。と。満。家。引。取。る。

その究竟の癖こそあれ、這屬將軍家住吉へ御代参を立らせんとおん
 事、御使の人を選ばし、仰出され、幸貴所へ溜紳家のおん
 るるれば指参らせん。倘仰附らざる、塚浪華遊覧の癖と序次小願り
 べ。十日十五日のおん暇の故障あるべきるらねば、其間小河内へ立起え
 恚々と料をるべし。さるふても姑摩姫の少女も、悔でぐと、必尋思
 るひく。他小雌伏し、さるふても姑摩姫の少女も、悔でぐと、必尋思
 と所へ急端不出立とべし。といふ、又豪表も、開頃小貧道も、必那里へ参會
 姑摩姫の術と破るべし。といふ、満家歡喜、猶その計策の概畧と、數刻密
 談ふ及び、後各辭して、回す。満家のその翌日、響九郎と喚出、就盛への
 回帖と遞す。猶恚々と事の意を得させ、回し差す。一鍼と飛して賢婢強人を捉ふ

第四十六回

奇遇を感じて忠士既往と語る

却説八九の莊院へ、正直が回す。後隅屋安次奴隸手作と召出、暗々小
 事情を得させ、赤阪の方へ差す。那首の動静を覗けり。那館へ出入り、蔬
 菜の癖と賄ふ、莊客の某甲の手作が知音あり。僥倖小欺倚り、甚麼とさ
 捜し、持水へ就盛が謀畧小隨ひ、媒鳥長給們と酷く禁め、齟齬ひ
 うる、梓由と深く包藏あり。基所の奴隸們へ、更不知者あり。これ
 が手作へ空しく、回す。安次小報、安次姑摩姫小就と報す。姑摩姫へ
 るれを、原未持永就盛們、恥辱と忍び、音もせぬ。必深く騙計する。の
 あらうべし。と疾くも悟り、安次、垣衣も、其旨と瑣言き示し。此小由断
 せ、一夜人定、后垣衣の独立、廁舎小去、回す。手水鉢小立倚
 て、檜杓を取、上手と洗、時思係る。袖牆の陰、小一個の癖者あり。覆回頭巾小



欲奪垣衣而
荷二即受細

伊賀傳第五回

小三

安次

面を隠し。身体を鎌甲と着下して。黒く装ひ。奸細の打込物とも言ど衝と寄
て垣衣を袂と把爪を引攫へて去んとするを垣衣眼敏く肴外見て咄嗟とつり
身と翻し。把を袂と掉拂へ。透もあらず。再立蒐りて手拿せんと争ふ
餘勢。小椽小指する手燭と蹴飛し。黒白も分ぬ星影。垣衣は彼此と身と及
つ。衣襟小縫る。鍼一線と抜把て。丁と打る。手凍の掌中。仙傳微妙の女使小
受る。狙ハ間も錯さ。頭中の透間を左眼小あつらひに打網と急所
の痛手小一聲叫びて。鬢居小僅と平張らう。さきども死ふに至らば足踏直
て衝立上り。腰の刀と見ると。後て音を聚小斬んとて。滅多打小薙で廻る。垣
衣の差違りて。再遍打べき鍼もあらず。頭小挿る。耳極の笄と疾く抜把て亦
打出を掌中の違ふべくも。刀持る右の腕小裏徹まで。打網を。這
小怯とて。癖者の刀を曼哩と採落して。抗ぐと。唯ひく。逃まんとせり。折

しも戦との風は音聲も。心と放さぬ安次の物音を。听て岸破と撥起。枕邊小
立る脇差の刀と把て。まじ出。外戸一枚蹴開き。樹間と潛りて。出會う。小逃んと
背向く癖者が。身後の方小走蒐ら。項髪廻で。拽寄つ。足を揚て。踢く。さ
仰さぬ小拽倒さうと。押へて。些も拵う。姑摩姫も。又音を。听て。守衛刀と
腰小帯び。手燭と携へ。出て来て。復一賊。扱へらう。とり。向小垣衣。快くも
長押小繫らう。早索手繰て。安次小遞。手と奪。疾縛めて。拽居
らう。姑摩姫。の噪き。る。氣色も。あ。猶彼此と。眷顧て。今宵の賊。一名と。肴
あれど。復一。尚小心と。支黨ら。く。開奴と。這方の小庭小拽。と。未。奴隷
們と。起。し。喧囂。く。詮。る。只。穩便小料理。べ。と。安次。畏り。て
左邊右邊。小心と。配。と。他小怪。き。的。も。所見。賊。が。棄。る。刃。と。拾。上。鞆
小収。めて。俺腰小帯。小索端と。把。て。拽。立。つ。外小遠。る。姑摩姫。の。便室。の中

庭小棟居う。姑摩姫の垣衣と酷く賞。鉞擲技と教へる倦ど習ひし
 你的手練。日數も経ぬ。上達し。今宵快くも初技小猛る。賊と拿へし思
 ら小倍てのと憑し。とくハ垣衣畏て想係らき。今宵の厄難。賊ハ手術の
 ある的らんと。豫て誨へさせあひし。鉞擲技のちうりせば。争う脱を待らる。声
 陰小依て助る。怪我の功名小さうらふ。復一郎が時よく撞見と捉へし幸小
 ひとのハ姑摩姫うち點頭き。技小誇らぬ。你的謙讓。然而こそこのよめ。若上
 うと喬小五十日。植隆光們が夜稠せし。その响ハ声小殺氣のじ故小快くも
 前知しうらる。今夜の賊ハさう祥や。案小五匹がうへまで。ハ拘らぬ。的
 らる欵。先疾仔細と向べし。那押居う。便室の障子と開せて。尚克者。小
 件の賊ハ左眼小鉞と擲して昏々と半死半生の体。さハ安次の鉞と投取り
 又腕先小立しうらる。銀の并と抜て。這奴ハ脆くも弱とこそ。ハ打棄措ハ死や

せんきてハ支黨の穿鑿も仕ぐう。倅の仔細も知くられ。響小貺て。うら神草
 と以て。今一番活し。如何あらんと伺へ。姑摩姫听て。ち點頭き。你的料簡
 最佳し。然れどもさう悪漢小。神仙の聖薬と費さ。勿体あり。只开莖を水小浸
 して。其水を塗て得る。よ。さても奇妙の験ありて。开奴が眼ハ潰らるる。垣衣
 开首小も持有う。このハ垣衣意得て。守護符袋小収め。活人草と採出し。茶
 碗小清き水と汲て。那神草と二遍三遍押浸。安次の賊ハ頭巾と投棄て。熟と看
 て。あ。小年紀ハ四十小迫る。色黒く頬骨荒て。處々小舊瘡の癩あり。一癩あり
 べき面頬。さ。不思議や。額小金印ありて。二字の形と露せ。痛瘡小弱て。頭と
 低う。願と引奉て。燈の下小差。髪ハ垣衣ハ甲斐々々しく。流る。血汐と紙以て
 拭ひ。件の水と瘡口小塗ん。う。賊が顔と。熟視する。半响うら。徐々や。と
 那靈水と。臂と眼小塗ま。う。神草の奇特掲焉。立刻小痛苦と忘れ

しや。那賊ハ已ハ復アト。頭と拾げて人々と左見右見と。安次ハ聲と厲ハ
 礮と睨視て。這草賊奴が大胆や。去秋五百日榎隆光が多勢と率カテ夜稠世
 中も。姫上のおん武勇中。一個も漏さず誅せられ。開由知さるるあじと怎も未
 だて虎の鬚と。鬼んとする。但し人頼まれ。飲真直不稟と。白状
 せしや。と責問して。件の賊ハ阿面と。色や。焦るる。ハ甚麼と。匿人這莊院
 前番。小倉官。賜り。一千金の有り。听ハ其と。賊人と。竊入て。処ハその美
 婦人の只獨。厠舎去と。着着。立地ハ法と。換て。搔攫ひ。娼妓不賣人と
 思ひ。外ハいつ。僕這地ハ参り。終ハ四五日以前。争う人ハ囁と。願
 く。おん慈悲。命と助け。と。勸解と。安次肯ハ。慥ハ。賄話。て
 免と。思ハ。愚昧。者。戎具。小身と。固て。便室。近く。入る。と。好
 る。小。垣衣女と。捕んと。も。財宝。小。の。眼と。掛。草賊。守。一。好

何時までも白状ハ。ま。お。を。焦ても。寔を吐と。腰の鉄扇。枝把。立。鬼
 と。と。多。姑摩。姫ハ。要時と。推禁。你の料簡。夜中の叫聲。高。し
 て。聊不。妙の處。あり。奴家。直。小。問。と。那賊。打。向。詞。和。ら。げ。て。ひ。や。せ。れ
 盗賊。慥。小。所。け。和。郎。ハ。必。囁。と。人。お。ん。疑。ひ。緋。の。始。末。と。包。む。と。真。直。不。稟
 せ。と。さ。ハ。命。と。助。け。も。と。尚。又。偽。と。陳。今。立。刺。小。斬。て。棄。ん。快。不。稟。せ。と。い
 間。小。垣。衣。も。詞。と。係。和。郎。ハ。奴。家。と。見。識。ぬ。と。奴。家。ハ。和。郎。と。見。識。う。今。十
 三年。前。の。秋。九。月。の。某。日。小。陸。奥。國。白。川。の。関。と。渡。瀬。と。の。間。有。榎。鎖。と。い。ふ
 支。村。の。産。士。神。祭。の。試。集。の。日。小。七。才。小。子。と。拐。う。て。越。後。國。へ。賣。ん。と。し。う
 り。あ。い。と。い。ふ。件。の。盜。賊。ハ。呆。ろ。ま。で。小。大。小。駭。き。現。の。ま。ん。人。ハ。さ。る。萍。あり。き。開
 と。怎。小。と。知。る。と。問。ハ。垣。衣。と。い。ふ。當。下。越。後。の。不。毛。山。麓。小。到。と。和。郎。と
 欺。き。樹。杪。小。攀。登。と。し。奴。家。ハ。登。時。旅。の。士。人。の。伴。當。夥。多。跟。隨。と。し。奴。家

難義と報し。和郎云云。陳せしうども。尚許さばて追捕稠合せんとせしれ
 久。和郎ハ逃んとし。葛藤不足脚と膝とて千尋の谷小墮する。迹
 来ハ又怎少と命助と這頭と。来つ今枕悪行の改らざして這めん館へ
 竊入ハ甚摩事ぞ。詳小稟上よ。奴家ハ和郎が故依て。生做らひ。父母ハ會
 ぶもさく。尚種々の災厄と脱して這里小御座と。姫人小奉仕せしむ。殊る御
 恩と被アと。身ハ今安き小月と。心の愁ハ一日片時も。絶るる根源と。心
 見分るべし。あらむ。と。いふ。件の盜賊ハ。酷く慚愧する色見えて。頭を低て黙然
 と。回答も得せ居らう。倅の奇遇ハ。姑摩姫ハ。いふも更ニ安次まふ。うち駭きて
 垣衣小向ハ。原来你ハ。這草賊ハ。幼き時。扱つられて。陸奥より。伊勢路まで。来たる人
 歎と。今宵まで。在下も。知らぬ。況て。姫人ハ。知食んや。も。は。苦し。う。む。の。倅。由。と。

米女曲小告て。おん疑慮を。先晴きせ。な。う。や。と。い。ハ。姑摩姫も。訝と。去給の夏
 復一。归来。已。し。开折。小。垣衣。和女郎。を。伴。ひ。く。故郷。ハ。伊勢。也。通。き。ぎ。伴。侶。と
 の。い。ひ。ハ。然。有。ハ。養家。の。石倉。氏。也。結髪。の。妻。る。べ。く。當時。推。盈。夫。妻。の。義
 死。小。忌。服。と。重。後。受。え。ま。は。す。の。謹。慎。也。吾。侪。也。さ。う。と。の。道。ぬ。る。べ。し。と。想
 ひ。小。多。れ。ハ。更。小。又。故。意。素。生。と。向。も。乳。さ。げ。一。稔。の。後。復。一。が。服。の。関。が。媒。約。と。て。
 婚姻。の。儀。と。結。せ。ん。と。暗。小。の。期。也。等。し。し。小。思。繫。き。や。復。一。詳。く。得。知。你。の
 素。生。陸。奥。白。川。の。人。ら。ん。と。數。百。里。の。山。海。と。阻。ら。る。小。這。マ。漢。小。扱。さ。し。倅
 何。の。抑。怎。ら。る。縁。故。也。報。て。も。苦。し。ら。ぬ。ら。う。ハ。所。て。疑。念。を。晴。ま。す。原
 是。你。ハ。什。麼。ら。る。人。と。向。き。て。垣。衣。畏。り。且。ハ。羞。ら。う。面。と。拾。て。い。ん。と。す。し。小。先
 ぞ。人。が。ま。う。く。も。思。さ。れ。て。おん。身。邊。近。う。使。り。せ。ら。ひ。且。文。学。より。武。藝。まで。誨。る。は。

御鴻恩ハ山海よりも高く深うり。されば仰の信もごとくも。妾が素生と未曲所
 え上べきゆゑ。些少憚るうもあり。假令亦听え上うとも。適来猛可小為
 便もさるまじ。一日二日と怠惰さうら小稟上べき序決もあつて。今日まで听え
 ならぬ。御心を阻うらうと思さる。最も恐くこそいへ。俾長くとも一遍
 妾の薄命の顛末と。聞食て賜へ。妾の原是。新田の庶流。脇屋右少将義
 隆朝臣の家臣。小館大六郎英直。といひらる者。の女兒と名どが信夫とす。りし
 侍り。往應永六年の秋。少将陸奥と落る。時。父英直の主君の附託通
 小路。うて尚陸奥小苗とて。関と渡瀬の間。う。緝鎖といふ處。小身をを躲し。
 姓名を。変形。白と竈。時の至るを等ひひ。小。妾が年紀七才あり。秋。开處
 の産土神。比祭の前夜。独外。小出。侍り。と。开る。男。抱拳。て。物見。させんと
 肩。小掛。る。その儘。遠く。走。り。と。と。介。後。の。箇。様。々。任。心。々。小。ひ。ひ。き。と。と。越。後

大河内ハ訓て
 オカチト云
 オホカフチ也
 あひさんども
 姉前編の
 まやとく更
 小改さうら
 上下小云う

へ去て賣んとせり。路。不毛山の麓。まで。箱城守。延。小。救。ま。り。り。それ。う。伊勢
 へ。侶。と。て。竟。小。守。延。が。艱。女。と。う。り。り。又。尔。後。小。守。延。ハ。主。君。と。諫。めて。退。け
 ら。五。柳。村。小。住。ひ。ひ。小。木。造。泰。勝。俺。身。小。意。慕。し。豪。集。し。う。と。と。大河内。在
 小。頭。雅。主。よ。訴。へ。ん。と。守。延。が。行。う。と。泰。勝。が。遠。矢。小。射。と。せ。り。俺。身。ハ。泰。勝
 が。三。十。日。の。別。荘。小。囚。に。て。泰。勝。小。從。の。ま。り。り。泰。勝。怒。て。逼。り。故。小。樓。より。落
 て。自。殺。せ。り。達。小。六。助。則。が。一。且。義。侠。の。執。腸。う。道。路。小。國。司。小。直。訴。し。て。那。里
 小。来。り。泰。勝。と。捕。へ。仙。丹。と。以。て。獲。生。せ。り。り。且。开。小。六。の。陸。奥。あ。て。七。才。の。時
 小。離。另。う。し。義。兄。あり。し。り。り。脱。漏。も。り。説。出。て。聲。と。悄。め。て。い。ら。う。の
 この。い。と。匿。ひ。き。り。小。侍。と。と。姫。う。へ。南。朝。の。忠。臣。あ。て。お。な。れ。強。て。藏。え。り
 も。侍。ら。む。那。達。小。六。と。や。う。ま。の。原。末。脇。屋。右。少。将。の。父。英。直。小。遺。囑。せ。り。且。幻。息
 せ。侍。り。と。耳。語。告。て。其。後。小。將。の。底。倉。の。温。泉。を。藤。白。安。同。が。與。小。擊。と。り。以

ひびきか 英直の當下陸奥と出て。假名川の客店にて死す。時母屋小遺託し。て小六と藤澤の豪俠野上著演許差し。白紙の帖おろし。そと著演が引
 奪て身小替て養育せし。且著演が為人福良長者と喚し。又小六
 が入水を示し。出て底倉へ赴き。少將の仇讐する藤白隼人が。一類残黨を
 結果あつ。客店の目四郎が義侠其子楫取庶吉が来歴まで。要と摘て脱
 かく話で。余後小六が教誨小因て去給の四月上旬小伊勢國を立去て。相模の
 藤沢へ赴んと。阿真將曹が鎌倉へ年始の佳禮の使者おゆ。便船と養
 母光樹庶吉と諸共志摩國鳥羽港より出帆せし。一五二十と細々と話説
 しく。姑摩姫の听く。津毎も感慨大なる。と。話切る處に至ると。或は怒り
 或は悲し。或は悼む。嗟嘆の聲と絶え。安次も頻々嗟嘆し。捉へ賊が索
 端と旁の榎樹小繫扯り。姑摩姫小一楫と。椽側小前より。垣衣小向ひ。道

や。原来你の楯城主の産子とあり。脇屋殿の老臣。館氏の女子。う
 る。欣。這は今始めて承りぬ。那館氏の新田一族大館主の庶流。脇屋殿の
 卿内小う。人のうと。豫て伊勢を听する。現江湖上の栄枯盛衰。想ふ。も
 肖。薄命こそ回。も。勅。と。這後の話説。在下代。と。稟上。在下。既
 小稟。如く。養母が。携子の。弟小。家と。嗣。と。する。色と。看。と。身と。退。と。惟。と。の
 う。另小。輕。卒。小。召。出。と。未。一。稔。も。立。ぬ。間。小。寸。功。も。あ。ら。ざ。れ。ば。這。儘。あ。と。て
 退。ん。も。素。餐。の。罪。は。る。き。小。非。必。と。案。煩。ひ。う。比。隊長。る。阿。真。將。曹。の。國。司
 満。春。卿。の。命。と。鎌。倉。の。管。領。家。持。へ。年。始。の。嘉。儀。を。演。ら。う。使。者。と。被。と。う。を。是。に
 在。下。も。駭。兵。と。と。晋。物。の。韓。檀。の。宰。領。小。隸。ら。と。同。僚。の。者。五。六。名。と。那。韓
 檀。を。護。ら。う。鳥。羽。の。港。より。船。小。乘。ぬ。此。餘。英。真。氏。の。家。礼。も。六。七。名。の。り。然。る。小。これ
 る。垣。衣。女。の。母。の。老。樹。と。楫。取。庶。吉。と。喚。做。う。那。達。氏。の。處。従。と。共。小。這。船。小。便

船せられぬ。勿論男女開另あまは。這人々の體の方る。一間と苑とて在る。正可
 小面ハ咲きほど。那ハ稻城の母女と疾くも這首小識ひき。抑這稻城右膳ぬら
 一隊の長きうら。在下が親父石倉蜂六。大和の宇陀より弓輕卒小。口出され
 て伊勢の多氣へ移住し當下より。稻城大人の懸兵小隷屬らとされ。蜂六ハ
 平素小那家へ立入。内外の辨まで裏心る。せら。就てハ在下が七才より
 多と。時々携て去ら。守延夫婦甚く憐。這垣衣の信夫女が。在下と同松
 る。遊戯敵手小せら。色葉字の始より。書とも誨へ籍とも讀。め昼夜
 習らせられ。く。形の像く小蚯蚓書とも記臆てハ。さて介後ハ在下が生長と
 る。隨ひて弓馬槍刀の藝と教へ。或ハ六韜三畧の一端とも講諭されて。只子の
 一般最愛す。れ。恁とも垣衣とハ十歳許の响より。男女の男と正ま
 て。相見ら。ゆと許され。疎々々。ひひ。小思保る。稻城大人の。忠言耳。逆

此回安次が
 話説の中の
 佳事と序次
 處を自ら
 説出難き
 如く。言
 も交。其
 筆。省。小
 説の法。は
 昔官情態
 の。心。と。外
 び。事。勿。し
 と。云

ひつ。國司の勘氣と蒙り。五柳村へ退隱し。多氣小在。どる。れ。蜂六も亦
 他の隊長小属ら。自然小疎遠小成。れ。恁とも在下ハ。父母小等。一。大恩
 あり。官長。且師。へ。鹿畧と存。き。況て多氣より退くも。あ。縁。間暇あり
 折。ごと。必。五柳の僑居と訪て。薪水の要事と便。傍。又。又。所漏。文。武の教
 諭。と。守。延。酷。志。と。感。せ。れ。或。日。在。下。と。雨。室。小。招。き。想。ふ。和。主。が。人。品
 骨法輕卒の兒小似る。非。ど。又。其。才。の。睿。敏。る。今。世。少。多。く。得。難。是
 以。多。氣。小。在。一。日。より。文。学。武。藝。と。学。せ。し。程。も。上。達。し。殆。俺。們。及
 び。ご。う。然。と。い。く。最。愛。と。往。々。世。評。と。探。し。所。小。蜂。六。ハ。実。子。小。あ。と。て
 楠家の浪人隅屋某甲。が。落。胤。と。い。ふ。者。あり。原。来。俺。們。が。眼。力。の。大。く。違
 へ。る。も。う。楠。木。と。隅。屋。と。い。ふ。素。より。一。族。の。長。臣。と。ハ。既。く。所。知。あり
 有。き。然。ら。ば。家。系。も。卑。し。と。思。ふ。小。着。て。一。議。あり。和。主。も。豫。て。知。如。く。



門のけしきと柳のうまさ
 とやらのうまさ
 五柳僑居
 のぶのうまさ
 守延擇佳婚
 ろろのうまさ
 八きむへき

俺おれ一箇ひとの女子むすめあまご未いまさるべき婚むかひもな。已いま小嫁こよめとべき期ときるれば這首こゝよりも那首あそこよりも。媳むすめ小成なりんといふ者ものは非あやまり。今世いまよの薄情うすぢやう。文武ぶんぶ忠孝ちゆうかう兼備けんびして二心ふたこころなれ丈夫おとこ。一個ひとぶ未いま者ものなるは。和主わぬしの今いまこそ輕率あしからずな。這戰國このせんごくの世よ小生こせいきて類たぐひ少すくなくる。老實らうじつ人ひとなれば。竟つひみ名なと奉たてまつ。家いへと貞まこと。君父きんぷ小忠孝ちゆうかうと盡つさん。鏡かがみ小照てらして看みるが像さう。然しかも女むすめ兒こ信夫しんぷと和主わぬし妻つまは娶とらさんと判妻つまた老樹らうじゆも商量ざんりやうせし。他たも和主わぬしが幾年いくとせの志こころと感かんぜらる。異議いぎも賢けんが諾だくひ。約やく莫な婚姻こんいんへ人間にんげん一生いっせいの大事だいじなれば。只ただ赤心せきしんの賢愚けんぐを撰せんびて。強いひて良賤りやうせんと論ろんぶ。況いはや俺おれへ退隱たいいんして。菊きく荒あ小侶こりやうふ。庶人しよにんとるまじ。和主わぬしが職しやく役やくどのまじ。怎いかで承引じやういんのあは。蜂はち六む示譚しだんして。近ちかき小這議ここのぎと料理りやうりん。と道みちと下したへ思おもひも依より師しの存念ぞんねん小呆こあきる。半はん晌しやうを。徐じゆ小て稟りやうを。物數ものかずる。小可こと。七才しちさいの歳とし。うん眼めと掛から。文學ぶんがく武藝ぶぎ大

小こと。示教しじやうと賜たまへ。聊いささ手足てあしの勞らうと以もつて。志こころと看かんえ。あつたれば。今いま愛あいを賜たまりて。婚むかひとせん。とま。仰おほる。骨ほね小刻こきと辱はぢる。九くの世よを更かへ。忘わすれざるべし。非あやり。有難ありがたく。こ。然しかも。這この議ぎ。一ひと向むか小。免めんと蒙まかるべし。开故かいこ。知しせ。像さう。小可こが。二才にさいの。响しやうと。父ちちの。託孤たくこの。命いのちを受うて。忠義ちゆうぎの。與よ小可こと。襦袢じゆばんの中なかより。看かん放はなちて。所縁しよえん小。着きて。蜂六はちむ許もと。羞はづかし。う。小可こも。頃ころ日ひ小。听き知しる。恁しんも。蜂六はちむ。此こゝも。現いま。多おほ年とし小。可こと。慈愛じあいと。親おやひ。恩義おんぎ深ふかく。実まことの。父ちち母ははも。勝かちて。恁しんも。恁しんも。小可こが。身みの。浮う沉しん。想おもふ。處ところ。去い。内事うちごとの。碍さまたち。故ゆゑ。小可こと。疎そん。然しかも。小可こが。身みの。浮う沉しん。明日あすの。俸ほうも。料りやうと。匹ひと。策計さくけい。普ふ通つうの。縁譚えんだん。固こ辞じと。時とき。况いはや。大おほ恩おん。一ひと方かた。名な家の。息女めいむすめと。賜たまる。遠患えんわん。難がたの中なか。苦くるしみと。係かへり。勿な體たい。小極こごく。共とも。住すま難がた。一ひと條じやうも。且かつ。世よの。人ひと口くち。繫かへり。名な家の。環瑾わんぎん。事こと

あつた恩と誓いと報ゆる小同じ。まゝに這義いん旨違ひく。假令申勘當と被る
 とも。決して領掌致し難し。許しあつた。と推辞しども。稻城大人の頭と左右小
 打掉て。その又和主遠慮し過さう。幾令内事小障碍ありて。志する辛苦不及ぶ
 とも。夫とより妻とより。開と厭ふべき事あり。信夫も往々教訓し。まゝに艱
 難も克堪つべし。且又縁と結ぶとも。必稻城の名跡と継て異姓と夕生口といふで
 いる。この又另小仔細もあはば。枉て這意小後へ。と再三再四説き。くとも。在下
 強面肯は。強て過辭して回り。分解され。継母の意味と猜して身と退んと
 想ひ。事のあれど。と知ど。と稻城大人の尚さ。小説き。問小料ら。茶
 勝が。非道の毒手小身と亡む。當下在下悲憤不堪。と送の滓甲乙と
 力と勤せと嘗つ。孰と案ずる。稻城大人の横災の全く。無賊の所為小あり。と
 往日豪奪せし。信夫との在處と知て。訟んと。大河内へ出立せし。折ら

られ。仇讐言と外小覓ふ。不及。併契据りて。惣小手とも。下し難し。什麼
 おもして契驗と得。在下國司小訪へ。信夫とのと拿復し。助太刀と仇撃の度
 と願ふ。除非中流小舟横り。徒々所も容らる。師恩の與小單身か
 りとも。茶勝と狙撃て。運拙く。斬死せんと想ひ。つ。あつた。と仕の途の俺も
 あり。と鈍や月日と過。間小。立刻達生の義俠。と茶勝へ捉へられ。信夫との
 還され。と。仇讐の一條。免され。と。所て本意。と想ひ。折と得て身退く
 時。至ら。他郷へ出て。茶勝と搜出し。先討捕と師の大神と報。と。這首小
 想ひ。の立。身とも。心小。任。兼。と。稻城一家の達生。と。指揮小。因。東の方へ。旅
 立。由。英虞氏の話。説小。既。所。在下。も。旅装小。暇。五柳の宿
 所。去。二臂の力を盡。と。得。本意。と。直。情由
 といへ。那船中。小。他見。と。憚。通着。倚。落着。の地名。も。所。折。

あつんと不知頁と舳先の方小ひぬ作者云這話説未盡終とも楮數の定限
あつん 不知 頁 舳先 の方 小ひぬ 作者 云 這話 説未 盡終 とも 楮數 の定限
 已小充是ハ卷と更て第四卷四十七回の發端小分解ると所終

開卷驚奇俠客傳第五集卷之三 終

